

# 英語教育における指導・評価計画の在り方

## － 4 領域を有機的に伸ばす指導についての考察－

指導主事 山本 博通

Yamamoto Hiromichi

### 要 旨

すべての言語活動は、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4領域の活動で構成されている。言語教育においては、それら4領域の活動を有機的に統合しバランスのとれた指導を行っていくことが大切である。そのためには、指導者が周到な指導計画を立て、その成果を検証・評価していくことが求められる。ここでは、4領域の活動が有機的に盛り込まれた指導・評価計画の在り方について検証する。

キーワード： 英語活動、4領域の活動、指導計画、評価計画

### 1 はじめに

英語教育においては平成10年（高等学校は平成11年）の学指導要領の改訂以来、「実践的コミュニケーション能力」の育成が主たる目標となっている。「実践的コミュニケーション能力」とは、「聞く」「話す」を中心とした言語能力ととらえられがちだが、コミュニケーションである以上、音声だけでなく文字による「読む」「書く」の能力も含まれる。

母語を習得する場合、言語習得は子どもの成長段階に応じて「聞く」「話す」活動から「読む」「書く」の活動へと、自然な流れの中で進んでいく。しかし、外国語習得においては、4領域の活動をバランスよく盛り込んだ言語の使用場面を設定し、計画的かつ効果的な学習指導を進めることが大切であり、そのことが「実践的コミュニケーション能力」の育成につながるのである。

また、効果的な学習指導が行われるには、まず、生徒が身に付けるべき目標を明らかにし、その目標習得に向けて、どのような形で指導していくかの計画を立て、その計画がうまく機能し成果をあげたかの検証、つまり、評価がなされなければならない。

今回、中学校、高等学校における英語の授業を言語習得のより効果的な場とするため、指導計画と評価の在り方を含めて、一考察を加えてみたい。

### 2 研究目的

「実践的コミュニケーション能力」を育成するために、4領域の活動がバランスよく盛り込まれた指導の在り方と、指導・評価計画の作成法を提案する。

### 3 研究方法

英語教育において習得すべき目標を明確にし、その目標を達成するための言語活動を考察する。また、指導が体系的に進むよう、指導計画の立て方と、その成果の検証を指導の改善に結び付ける評価の在り方について検証する。

## 4 研究内容

### (1) 習得すべき目標

指導計画を作成するには、生徒が身に付けるべき英語力の目標を設定することから始めなければならない。

#### ア 中学校における英語教育の目標

中学校において生徒が身に付けるべき英語力については、学習指導要領に次のように示されている。

#### (中学校における外国語教育の目標)

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

#### (英語の目標)

- (1) 英語を聞くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 英語で話すことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) 英語を読むことに慣れ親しみ、初歩的な英語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。
- (4) 英語で書くことに慣れ親しみ、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

学習指導要領に定められている英語の目標は、中学校の3年間で生徒が身に付けるべき基礎・基本を示したものである。各校においては、学習指導要領を踏まえた上で学校の実態（地域の文化的特色等）や、生徒の学習の実態等に応じて、英語学習を通して何を学んでほしいのか、また、どんなことができるようになってほしいのか等、各学校の思いを込めた3年間の目標や学年ごとの目標を設定することが必要である。

#### イ 高等学校における外国語教育の目標

同様に、高等学校において生徒が身に付けるべき英語力の目標は学習指導要領に次のように示されている。

#### (高等学校における外国語教育の目標)

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

#### (英語 I の目標) ※他の科目については学習指導要領参照

日常的な話題について、聞いたことや読んだことを理解し、情報や考えなどを英語で話したり書いたりして伝える基礎的な能力を養うとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

高等学校においては、英語という教科は学ぶべき目標に応じて各科目に細分化されるが、中学校と同様に、学習指導要領に示された基礎・基本を踏まえた上で各学校に応じた達成目標を科目ごとに設定することが必要である。

#### ウ 各校の実態に応じた英語教育の目標

上述したように、学習指導要領で示された目標を踏まえて、各学校はその実態（地域の文化的特色等）と、生徒のニーズに応じて学校独自の目標を定めることが必要である。

#### ◇ 各学校の特色を生かした英語教育の具体的目標

- (ア) 学校が歴史的遺跡に恵まれた地域に位置するので、地域の歴史について初歩的な英語を用いて紹介できる。
  - (イ) 海外修学旅行に出かけるまでに、税関審査等での受け答えをはじめ、簡単な英語会話ができる。
  - (ウ) 学校紹介の英語の Web ページの一部を、高校3年生段階では自分たちで運営できる。
  - (エ) 海外姉妹校との交流の際に、基礎的な英語を用いて自分の気持ちを伝えることができる。
- (2) 目標達成のために4領域が有機的に関連した言語活動

ア 中学校の場合

中学校における英語教育の目標は、「初歩的な英語で4領域の英語活動が行えること」と「積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲を育成すること」である。この目標達成のためには、英語学習に対する生徒の興味・関心を高めながら、4領域の活動が有機的に関連した英語の使用場面を設定することが求められる。事実、英語はもとより言語の日常の使用場面では4領域の一つが単独で用いられることは極めて少ない。例えば、次のような場面を考えてみるとよく分かる。

- ・友達と電話で話す。（「聞く」「話す」の統合）
- ・新聞で読んだ記事について人に伝える。（「読む」「話す」の統合）
- ・先生の話聞いてグループで話し合い、その結果を書いて発表する。（「聞く」「話す」「書く」の統合）

このように、単に「読む」だけ「聞く」だけという場面より、複数の領域が組み合わされた活動の方がより自然な言語の使用場面であり、この意味においては、4領域を統合的に扱う中学校での英語教育においては、言語活動の設定は比較的容易であるといえよう。

ただし、中学校での英語学習の場合、言語学習の入門期にあるため「聞く」「話す」の領域にウエイトが置かれるのが一般的で、教科書が取り扱う言語材料もダイアログ形式の英文が多く、授業での活動も「聞く」「話す」をメインとしたものになる傾向がある。

以上の観点から、中学校の英語学習において4領域が有機的に関連した言語活動を行おうとした場合、どうしても、まとまった英文を「読む」活動が不足しがちになることが課題となる。その解決には、教科書で多用される会話形式の教材をまとまった英文にリライトしたり、教材と関連した文章を他から引用したりして、生徒に「読む」活動を補っていくなどの配慮が必要である。

イ 高等学校の場合

高等学校においては、英語Ⅰ、Ⅱ、総合英語等を除けば、言語活動の各領域を特化した科目設定が行われている。しかし、中学校同様、高等学校における英語教育の目標達成のためには、それぞれの科目においても、指導者の工夫で4領域の活動を有機的に関連付けた指導を目指すことが望まれる。

(ア) 英語Ⅰ、Ⅱ、総合英語の授業において

これらの科目は、中学校の英語学習の延長であり、本来、4領域の活動をすべてバランスよく指導することを目的とした科目である。しかし、中学校とは逆に、「読む」活動が主となり、音声面での活動が少なくなりがちである。それは、オーラル・コミュニケーションやライティング等の授業があるため、「聞く」「話す」「書く」の活動はそれらの科目で行えばよいと判断されていることが一因である。しかし、レッスンごとに音読テストを課したり、レッスンの内容に応じて「感情を込めて朗読する」「登場人物の気持ちになって会話練習をする」等の活動をロールプレイで行ったりするなどして、音声指導を取り入れる配慮は必要である。

(イ) オーラル・コミュニケーションの授業において

オーラル・コミュニケーションⅠ、Ⅱにおいては、文字どおりオーラルな活動が主となる。ただ、扱う言語材料が、英語Ⅰ、Ⅱに比べて平易になり、よほどうまく授業を構成しないと、活動が単調になりがちな点が課題と言える。

「読む」「書く」の活動を盛り込むには、以下のような活動が考えられる。その際、生徒の英語力や興味・関心等に配慮することは言うまでもない。

〈初級〉

- ・英語の歌を取り上げ、歌詞をしっかりと読ませる。(難解な語や表現は注釈を付け、文法的な説明はできるだけ避ける。)
- ・ゲームを実施する際には、ルールを英文で示し、内容を読み取らせる。その際、興味がわくような工夫が必要である。例えば、ゲームに用いる小道具を先に渡し、どう使うのかの説明文を読ませると意欲を維持しやすい。

〈中級・上級〉

- ・プレゼンテーションを目標にした活動を行わせる。生徒にテーマに沿った調べ学習を行わせ発表する内容を英語でまとめさせる。その際、英文の資料を調べさせることで会話的な表現に終始せずに、しっかりした内容を適切な語彙と文構造で表現することを目指させる。また、発表後に、復習・まとめ、発展としてそのトピックに関連した文章を読んだり、書いたりする活動を入れる。
- ・ディベートに挑戦させる。ディベートにおいても資料を読むことが必要となるため、事前・事後に、しっかりと「読む」「書く」の活動を取り入れることができる。

オーラル・コミュニケーションの授業は、「読む」「書く」の活動を取り入れることで、授業の内容が深まることになる。また、同じ「読む」活動でも、調べ学習のように目的をもって読むことで、その活動自体が深まるというメリットもある。

(ウ) リーディングの授業において

「読む」活動を主にした科目であり、いかに質の高い読みを多く行えるかが問われている。

ここでも、「聞く」「話す」「書く」の活動を取り入れることで、「読む」活動が更に深化することになる。

「読む」活動の指導は、三つの時期に分けて行うことができる。次にその例を挙げる。

・ **Pre-Reading** における指導

英文を生徒に読ませる前に、英文のテーマに関連する質問を行い、テーマに関する興味・関心を高める。

・ **While-Reading** における指導

英文の内容に関して質問を出しておき、その答えを探しながら英文を読ませる。

・ **Post-Reading** における指導

読み終えた英文の内容のまとめになるような質問を出し、個人又はグループでその答えを考えさせる。または、その英文のテーマに関連した別の簡単な英文をグループごとに読ませ、その新たな英文の内容について発表させる。(その際、できれば各グループに渡す英文は別ものにしておくと他のグループの発表を「聞く」活動が深まりやすい。)

「読む」活動は、文章からどんな情報を得るために読むかが明確であれば、より効率的な活動となる。「読む」活動で得た情報を基に発表等の「書く」「話す」活動につなげていくことが効果的である。

### (エ) ライティングの授業において

「書く」活動においては、単に単文の和文英訳に留まらず、自分の考えを英語で表現することが到達目標として求められる。ライティングの教科書は、文法項目順に構成されていることが多く、構文の習得に終始してしまいがちな面がある。「聞く」「読む」「話す」の活動を関連付けることで、「書く」活動の深化が図れると言える。

#### ◇他の領域の活動と「書く」活動を関連させた指導例

##### 〈初級〉

- ・平易な英文を読み、その感想を英語で書き、その書いた英文をみないで、口頭で発表する。
- ・ペアワークで互いの自己紹介を行い、相手のことを別の人に紹介する文章を書く。
- ・ALTや教員がパーティの企画を提案し、そのパーティへの招待状を生徒に作成させる。

##### 〈中級・上級〉

- ・4、5人のグループに英語の未完成のストーリーの前半部分を与える。グループの各自が順番に未完成のストーリーの後半部分を一文ずつ自由に書き、最後の1人がストーリーを完成させる。最初に書いた者が完成したストーリーをよく読み、その話の要旨を他のメンバーに説明する（生徒の学習段階に応じて最後の説明は英文を見ないで行うと「話す」活動が深まる。）。これらは高等学校の英語科の各科目における活動例であるが、学習段階に応じて到達目標を設定することで、中学校でも十分活用できる。

### (3) 指導・評価計画の在り方

以上述べてきたように、効率的に言語学習を進めるためには、4領域の活動を有機的に関連付けた言語の使用場面を設定することが大切であるが、そのためには、周到な指導計画を作成することが必要である。以下、その手順について考察してみたい。

#### ア 指導計画の在り方

##### (ア) 3年間を見通した計画

指導計画を作成する場合に最も大切なことは、指導者が3年間を見通した計画を作成することであり、その基本となる習得すべき目標については、4の(1)の項で述べたとおりである。

計画立案の際には、生徒の英語力（中学校では小学校英語教育における活動の実態、高等学校では中学校での学習内容等）を的確に把握する必要がある。また、生徒のニーズ（進路希望、資格試験受験希望等）にも配慮すべきである。

##### (イ) 年間指導計画（科目ごとの指導計画）

3年間の指導計画に基づいて、中学校であれば英語科の年間指導計画、高等学校であれば英語科の各科目の指導計画を作成することになる。年間目標、科目目標を明確にした上で、教材の内容を踏まえ、生徒の興味・関心を高めながら、プレゼンテーションやレポート作成などの大きな活動をどの時期またどの教材に盛り込むかを計画していく。その際、定期考査の時期やインタビューテスト、単元ごとの復習テスト等、評価の時期も明確にしておくことは言うまでもない。また、生徒たちに評価計画や到達目標を明確にしたシラバスを示しておくことも、生徒の学習意欲を高める上で効果的である。

##### 〈教科横断的な計画〉

他教科との関係にも配慮し、他教科で扱う題材と内容的に関連した単元を同じ時期に学習するなどの工夫があれば、学習の内容に深まりが出て、生徒の学習意欲を高め学習内容を定着させることにもつながる。特に、社会科、理科、総合的な学習の時間の学習内容には配慮すべきである。

〈学校行事と関連した計画〉

学校の行事に合わせ、その内容に関して英語での活動を工夫する。特に、修学旅行や文化祭などは生徒の関心も高く、調べ学習なども盛り込みやすい。

#### (ウ) 単元計画と授業計画

単元計画と授業計画は、実際の授業を進めていく上では最も重要な部分である。年間計画（科目ごとの指導計画）に基づいて単元の目標を設定し、その目標達成のために何時間目にどのような活動を行うかを計画するのである。4領域が有機的に関連した英語活動を具体的に設定するのもこの場面である。年間計画に盛り込むプレゼンテーションなどの大きな活動は、バランスよく4領域の活動を盛り込みやすいが、活動に時間がかかるという問題もあり単元ごとに実施することは不可能である。日常の授業において、アイデアを凝らして、いかに効果的な活動を工夫することができるかは、授業計画の立案にかかっているのである。

#### イ 評価計画の在り方

指導計画に沿って効果的に学習指導を進めていくためには、適切な評価を適宜実施し、指導計画の手直しをしながら、授業改善を心がけていかなければならない。そのためには、指導計画の中に適切な評価計画が盛り込まれている必要がある。

評価の時期や計画を生徒に知らせておくことの大切さは、(イ)の「年間指導計画」でも述べたが、生徒には評価規準も示しておくことが重要である。例えば、インタビューテストであれば、事前に使用すべき新出語や構文を示しておいて、「新出語や構文を使用して、五つの質問のうち三つ以上に適切に答えることができる」という具体的な評価規準を生徒に伝えておく。そうすることで、生徒が学習の到達目標を知り、学習意欲を向上させることにもつながるのである。

## 5 おわりに

言語習得には、その言語がコミュニケーションの手段として用いられている環境で生活することが一番の近道である。しかし、現実問題としてそれがかなわぬ以上、それに近い環境を授業の中で構築することが大切である。4領域の活動を有機的に関連付けて指導することの必要性はそこにあるといえる。そして、そのことが学習指導要領で求める「実践的コミュニケーション能力」の育成につながるのである。そのためには、指導者は日々研鑽しながら効果的な指導の在り方を研究していかなければならない。本県では、平成15年度より NETS PPlan 研修講座（『英語が使える日本人の育成』のための行動計画）に基づいて実施しているすべての英語教諭対象の研修講座（研修講座）を実施し、英語科教員の指導力、英語運用能力の向上を図っている。研修講座では、Speaking、Listening、Reading、Writing の講座を別個に開設し、その中で4領域の活動が有機的に関連した指導方法などの研修を行っている。

研修講座で学んだ内容を、自分の生徒たちの実態に合った活動にアレンジし授業に取り入れていくとともに、教員が互いに情報交換し、教材の共有化を図ることも効果的な取組となるだろう。

## 参考文献

- |                            |               |     |
|----------------------------|---------------|-----|
| (1) 中学校学習指導要領解説－外国語編 英語編－  | 文部省           | H10 |
| (2) 高等学校学習指導要領解説－外国語編 英語編－ | 文部省           | H11 |
| (3) 「英語授業力」強化マニュアル         | 大修館           | H17 |
| (4) 実践的英語教育の指導法            | ピアソン・エデュケーション | H15 |
| (5) 英語教師のための新しい評価法         | 大修館           | H14 |